

## 応現

「久遠実成阿弥陀仏

五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ

迦耶城には応現する。

婆婆永劫の苦をすてて

浄土無為を期すること

本師釈迦の力なり

長時に慈恩を報ずべし。」（和讃）

それは春もたけなわな四月八日である、

拘利王の別殿のあるルンビニー園には、無憂樹の華が薄紅に咲いて、春のうららかな陽の光が、満庭をゆるやかに流れて、何ものかを待ちもようけるかに見える、美しい四月八日のことであった。

迦毘羅王国の浄飯大王の妃摩耶は、お郷里方である拘利王国に來たつて、めでたいその日を待つていられたのであった。

ルンビニーを静かに賞でつつ、咲き誇る無憂樹の枝に手をふれさせられたその時だった。

ああ。その時だった。大地の光、人類の救主、後の大聖釈迦牟尼世尊は降誕せられたのであった。

生れ出でたる者の「おぎゃあ」の声、ああ、その声は一体何を意味するか。

生れ出るや、七足を運びつつ、天を指し、地を指して、天上天下唯我独尊！ と叫んだのが釈尊であった。

釈尊、キリスト、孔子、親鸞、ナポレオン、石川五右衛門、奏の始皇帝、ベートーベン、ロダン……………

その全てが「おぎゃあ」と生れたのだ。

しかもその一生の歩みが、やがてこの「おぎゃあ」の声に何等かの意味を盛りあげる。

人類の上により大きな苦難をもたらすような呪われた存在として一生を過すのか。

束縛の桎梏の中にあえぐ大衆を、自由の楽園につれ出す尊き一生を送るのか。

やがての日の大聖生れましぬ。

天上天下唯我独尊

世界人類が救われる予告として、人々に「自己を知れ」と促す叫びの如く聞かれるではないか。

我等はすでに「おぎゃあ」の声を過去にして、生と死の間に呼吸をつづけている。「おぎゃあ」の声は我等の無意識の世界であった。

最初があれば最後がある。やがて死の床に横わる時、我等の死は何を意味するのか。死の刹那に何が荘嚴され、あるいは何が一生を象徴するのだ。その象徴がやがて「おぎゃあ」の声を象徴する。

人生は嚴肅である。真剣なる生き方をせよ。

汝の今日の歩みが、汝の死が何であるかを決定し、汝の「おぎゃあ」の聲が何であったかを決定する。

迦毘羅城は歡喜の中に包まれた。

淨飯大王は世継ぎの君の御誕生を心からお喜びになった。

しかし満つればかぐる世の相、聖母摩耶は不幸にして、太子御降誕と共に、地上に消えて天上の人となられた。

人生の無常は如何なる時にも、如何なる処にも遠慮をしない。

悉多太子はお叔母君、摩訶波闍婆提の手に育てられて行つた。

「我、正覺を成就せざればこの座を起たず！」

菩提樹下、大磐石上の釈尊を憶う。

最後の時が来たのだ。

王位を棄て、国を捨て、富を棄て、妃を、子を、そしてその他一切を棄てた釈尊が、不滅の大道を発見するのか、遂に苦悶と懷疑と、敗慘におわるのか、

歩んで至つた必然の至境、彼は今、遂に正覺のみ座にのぼる。

2

満たされざる心、新しい芽が一切を破つて誕生する。

生命の内奥に動き出でる、自覺への声、何を与えてもうなづかぬ魂。

美姬幾百千も無効であつた。夏、冬、雨期の三時殿も無意味だつた。妻子に対する愛執も、その願心よりは弱かつた。

人は皆、名譽を、地位を、事業を、學問を、それを成就したるものを人生の勝利者だという。けれども、生れて、老いて、病んで、そして死ぬる。しかもその間に、断に、貪欲の奴隸となり、瞋恚の悪鬼となり、愚痴の幽霊となつて、無意味なる営みをつづけつつ無明界に浮沈する。その痛ましい鬭争、相殺の自害害彼の現実相、人類最後のものは一体になのか。眞実生活とは何なのか。

眞理は常に一人の天才を借りて叫ぶ！

おそるべきは天才である。

天才は悩む。鋭いが故に悩む。

生老病死を見て悩む釈尊、

弱肉強食の一切群生の相に、大悲同感して苦しむ釈尊。

花園の蔭、官庭の深窓、狩獵の野、安価なる異性の媚、

天地、自然、一切の人、それらがよつてたかつて、釈尊を悩みへ悩みへとつれてゆく。

悩む者は悩みぬけ！  
沈む者は沈みきれ！

悩む心は何かを求める心だ。今ある何ものにも満足することの出来ない心だ。この心が遂に釈尊をして一切を捨てて求道の途に出発せしめたのだ。

二月七日の夜、名馬カンダカに乗って、チャンナをつれて出家する釈尊の心、その悲痛な心、その厳肅な心、この心を味わなかつた聖者があり得るか。

魂を打込んだことのみ生命の血は流れている。  
生命をつぐ者は生命を捧げてゆく。

かくて太子はバギヤ林の奥深く、有名なるバギヤ仙をたづね、更にミル山に阿羅々仙人を訪れ、遂に鬱陀羅仙に会つて道を聞いたが、失望の外何ものもなかつた。

太子は尼連弾河のほとり、象頭山の優留毘羅の林に入つて、大苦行をはじめた。その苦行六年……しかし苦行は決して真実の悟に入るべき方法でないことを知るや、その苦行を棄ててしまった。

その時代の皆が承認せる習慣とおきてを棄てることはむずかしい。

苦行無効、苦行林をすてた太子は、尼連禪河に入つて沐浴して身を清め、善生村の長の娘の供養する乳靡に体力を養い、伽耶山に入つて菩提樹下、大磐石の上に、結伽趺座した。

「虚空より刀杖、我が身に雨降り寸々節々に体を割くとも

我もし生死海を渡らずば、この菩提樹下を終に移らず。」

釈尊が菩提樹下に端座冥想するや、悪魔はその成道をさまたげようとする。

美しい女の媚び、雨降る刀剣

天地に轟く雷鳴、群る悪鬼夜叉、

天地は曇り、烈風大雨のすさまじさ、今や大魔王は最後の奮戦をこころみた。

太子の金剛心の前には一切無効であつた。

人生をすねた中年男、真面目な問題を、からかいや、皮肉で茶化してしまうお人好し、自分の存在が、他人を苦しめる中心であろうが、我欲さえ満されたらそれでいい。随つて釈尊のこの精進は結局無意味であろう。

一生騒々しいジャズの気分で送られる人、

そうした人には、悪魔は見えない。悪魔の支配の下に生きるが故に、悪魔は見えない。随つて釈尊のこの精進は結局無意味であろう。

時は二月七日の夜更け、一切の悪魔煩惱はその大慈悲に摂取されてしまった。  
寒月高く中天にかかり、天地寂として声なし。

太子の心又いよいよ寂靜、欲を難れ、悪を去り、深い禪定に入つて平等を覺り、苦樂喜愛を亡し、一切の囚れより解脱して遠き過去を憶い、宿世を感じ、一切の無明をはなれて、闇は遂に破れた。

更に二更に至れば、神通の眼開いて、十方世界のはてしなき衆生が、はてしなき生死界に流転する様をつきとめて、十方世界は我が有なり、一切衆生は我が子なりと叫び、大悲の涙は一切衆生の上にそそがれた。

更に三更に至るや、苦の因をつきとめて煩惱であることを知り、これを滅するの道を明かにさとり、一切衆生が無始以来、生死流転するは、無明を根本とする十二因縁の因果によると悟り、根本無明を大般若の智慧によつて破り、ここに大光明は太子の心中に輝き一切万法の根源をつきとめて心安らけく身は清淨。

第四更、暁の明星燦として輝く頃、太子一生の大願は円満に成就して、無上覺をば開かれた。太子二十五歳、二月八日ついに釈迦牟尼仏は誕生せられたのである。

小我は滅して大我に生き、

生死を超えて涅槃をさとり、

久遠の法身は顯現しをはりぬ。

煩惱即菩提、生死即涅槃の妙境

最高理念の実現せられたる絶対人格は、永くアジアの光として、一切衆生の救主として、両足を一切衆生救済の聖業に運び出したのであった。

四月八日！ そは実に後の如来を生んだ日であった。この天才を待つて、久遠の法身は、応化の仏を生み、自然に法爾に真理を名告らせたのであった。

星霜流れて二千五百年、釈尊の上に流れた生命の血は、龍樹の上に、天親の上に、曇鸞、道綽、善導、源信、法然、親鸞、その他億々の衆生心を仏化しつつ、遂に今日我等の上に南無阿弥陀仏となつて廻向顯現した。

合掌のうちに広大なる恩徳を謝す。而して限りなく大悲の血の流れよかしと念ずる。